

3. 本園の現況

3-1 現況及び施設配置

以下に本園の現況平面図（図2-52）と、主な施設の配置（図2-53）を示す。

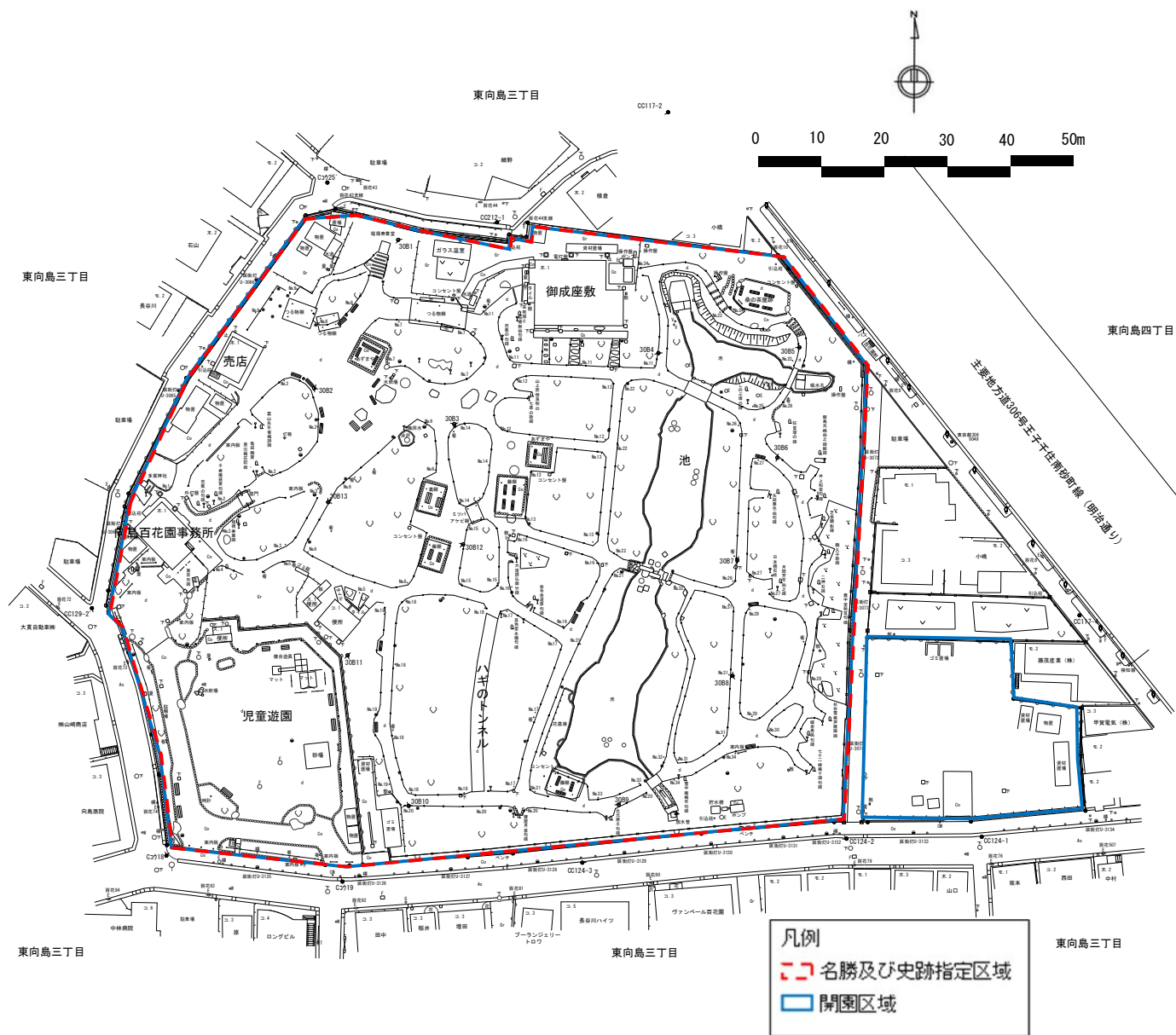


図2-52：向島百花園平面図 平成30（2018）年

II 本園の歴史・本質的価値

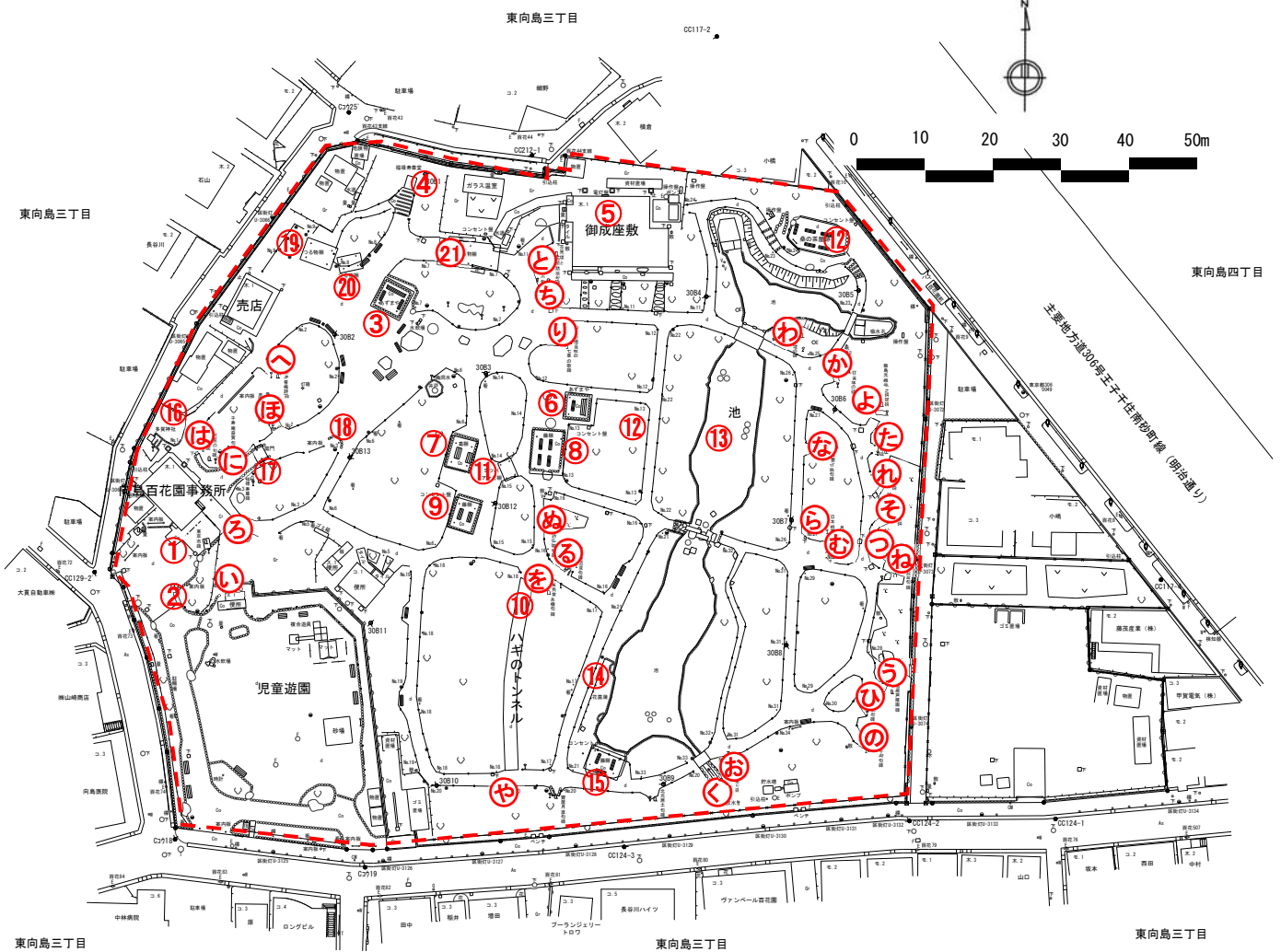


図2-53：主な施設の位置図

施設

- ① 管理事務所
- ② 入口
- ③ あずまや
- ④ 福祿寿尊堂
- ⑤ 御成座敷
- ⑥ あずまや
- ⑦ クズ棚
- ⑧ 藤棚 ⑨ 藤棚
- ⑩ ハギのトンネル
- ⑪ ミツバアケビ棚
- ⑫ 桑の茶屋跡
- ⑬ 池 ⑭ 菖蒲園
- ⑮ 藤棚 ⑯ 多賀神社
- ⑰ 庭門 ⑱ 花の案内板
- ⑲ つる物棚（カボチャ）
- ⑳ つる物棚（ヘビウリ）
- ㉑ ヒョウタン・ヘチマ棚

石碑

- ㉒ 百花園の沿革の碑
- ㉓ 福祿寿尊碑
- ㉔ 芭蕉「春もやや〜」句碑
- ㉕ 千樹庵益賀句碑
- ㉖ 亀田鵬斎墨沱梅莊記碑
- ㉗ 雲山先生看梅碑
- ㉘ 茶笏塚と柘植黙翁句碑
- ㉙ 芭蕉「こんやく」句碑
- ㉚ 山上憶良秋の七草歌碑
- ㉛ 大窪詩仏画竹碑
- ㉜ 金令舎道彦句碑
- ㉝ 其角堂永機句碑
- ㉞ 初代河竹新七追善しのぶ塚
- ㉟ 二代河竹新七追善きょうげん塚の碑
- ㊱ 飯島光山我翁之碑名
- ㊲ 井上和紫句碑
- ㊳ 芝金顕彰碑
- ㊴ 鶴久子歌碑
- ㊵ 二神石碑
- ㊶ 最中堂秋耳句碑
- ㊷ 矢田蕙哉翁之句碑
- ㊸ 日本橋石碑
- ㊹ 月岡芳年翁之碑
- ㊺ 螺舎秀民句碑
- ㊻ 杉谷雪樵芦雁画碑
- ㊼ 七十二峰庵十湖句碑
- ㊽ 雪中庵梅年句碑
- ㊾ 北元居士句碑
- ㊿ 寶屋月彦

3-2 主な視点場からの景観

本園における主な視点場からの園内の景観を図2-54及び図2-55～72に示す。

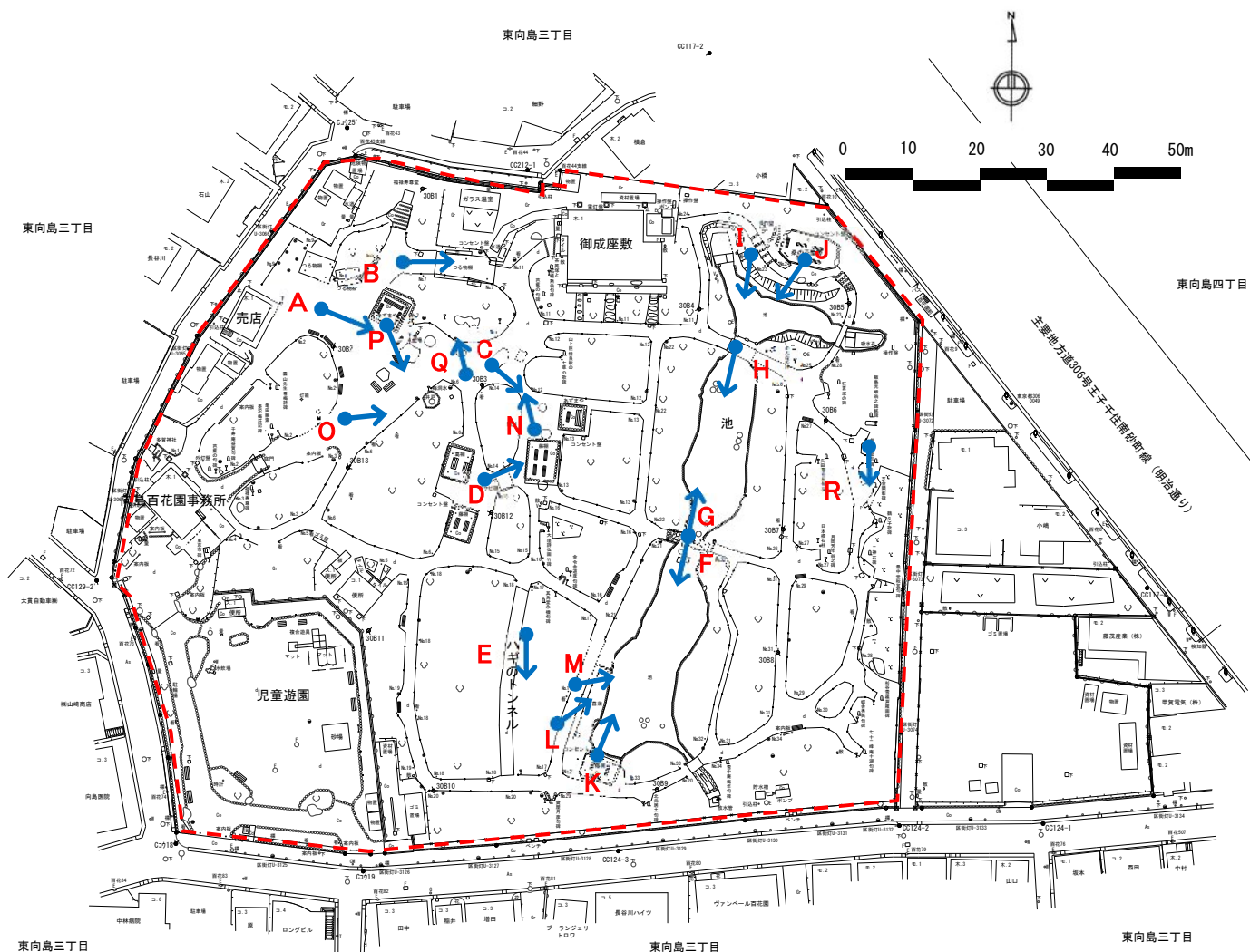


図2-54：主な視点場



図2-55：A 売店前広場の景観
（令和元年7月5日）



図2-56：B 売店前広場からヒョウタン・ヘチマ棚の景観
（令和元年7月5日）

II 本園の歴史・本質的価値



図 2-57 : C 散策路からあずまの
景観 (令和元年 7 月 5 日)



図 2-58 : D 藤棚前からミツバアケビの
景観 (令和元年 7 月 5 日)



図 2-59 : E ハギのトンネル中央付近の景観
(令和元年 9 月 27 日)



図 2-60 : F 沢渡りから池の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-61 : G 沢渡りから土橋方面の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-62 : H 土橋から池中央橋方面の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-63 : I 桑の茶屋跡地から土橋方面の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-64 : J 桑の茶屋跡地から護岸の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-65 : K あずまやから石橋の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-66 : L 菖蒲園の景観
(令和元年 6 月 8 日)



図 2-67 : M 菖蒲園から池の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-68 : N あずまやから散策路の
景観 (令和元年 7 月 5 日)



図 2-69 : O 秋の七草の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-70 : P あずまやから売店前広場の景観
(令和元年 7 月 5 日)



図 2-71 : Q 春の七草の景観
(平成 31 年 3 月 11 日)



図 2-72 : R 碑①付近から碑②方面の景観
(令和元年 7 月 5 日)

3-3 本園及び周辺に関わる法規制等

本園及び周辺に関わる法規制等は、以下のとおりである。

(1) 都市計画法（昭和43年6月15日法律第100号）

本園及び周辺の都市計画は以下のとおりである（図2-73）。

- ・都市計画公園：名称 東京都市計画公園第8・3・1号向島百花園公園
位置 墨田区東向島三丁目地内
計画決定面積 1.1 ha 種別 特殊公園（植物）
決定告示（当初）昭和32年12月21日 建設省告示第1689号
（最終）平成6年1月28日 墨田区告示第14号
- ・区域区分：市街化区域
- ・用途地域：準工業地域（第2種特別工業地区）、商業地域
- ・容積率（%）：200・300%（準工業地域）、400%（商業地域）
- ・建ぺい率（%）：80%
- ・準防火地域、防火地域

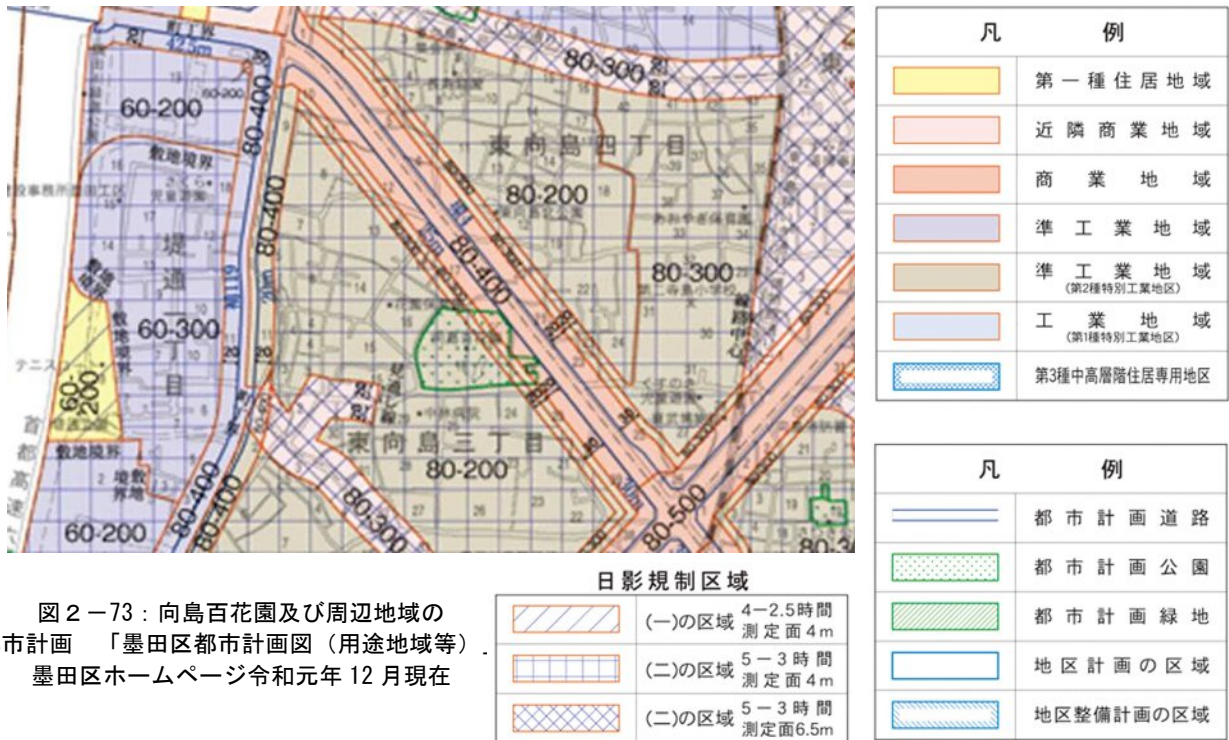


図2-73：向島百花園及び周辺地域の都市計画「墨田区都市計画図（用途地域等）」
墨田区ホームページ令和元年12月現在

平成22（2010）年3月に墨田区では、美しい街並みをめざして、建築物の高さ制限を定める「墨田区高度地区」を指定し、本園周辺では、明治通り南側高さ22m、明治通り北側高さ28m、その他高さ17mを超える建築物は原則として建築できない。

（2）都市公園法（昭和31年4月20日法律第79条）、東京都立公園条例（昭和31年12月27日条例第107条）

本園は、昭和13（1938）年に東京市が寄付を受け、昭和14（1939）年7月8日に向島百花園として公開し、現在は東京都立公園条例により設置、管理されている。

向島百花園 開園面積：10,885,88㎡

種別：特殊公園（植物園）

土地所有：東京都

なお、開園区域には、南西側の児童遊園と南東側のサービスヤード（未公開）を有する。

（3）景観法（平成16年6月18日法律第110号、平成30年5月改正）・東京都景観条例（平成18年10月12日条例第136号）

本園周辺は平成19（2007）年、景観法に基づく東京都景観計画による「文化財庭園等景観形成特別地区」（図2-74赤線）に指定されている。

「文化財庭園等景観形成特別地区」では、各公園の外周線からおおむね100m～300mまでの範囲について、景観形成の方針を定め、一定の規模以上の建物等に対する景観誘導や屋外広告物の表示を規制し、庭園の内部からの眺望景観を届出により保全している。平成21（2009）年5月1日には墨田区が景観法に基づく景観行政団体となり、同年11月には「墨田区景観計画」を策定し、景観法に基づく届出等は墨田区において行っている。

また、大規模な建築物等に対し、文化財庭園等の眺望の保全に関する景観誘導を行うため、庭園外周からおおむね1kmまでの範囲を「大規模建築物等の建築等に係る景観誘導区域」（図2-74青線）とし、景観形成基準により計画段階での東京都への事前協議を行っている。

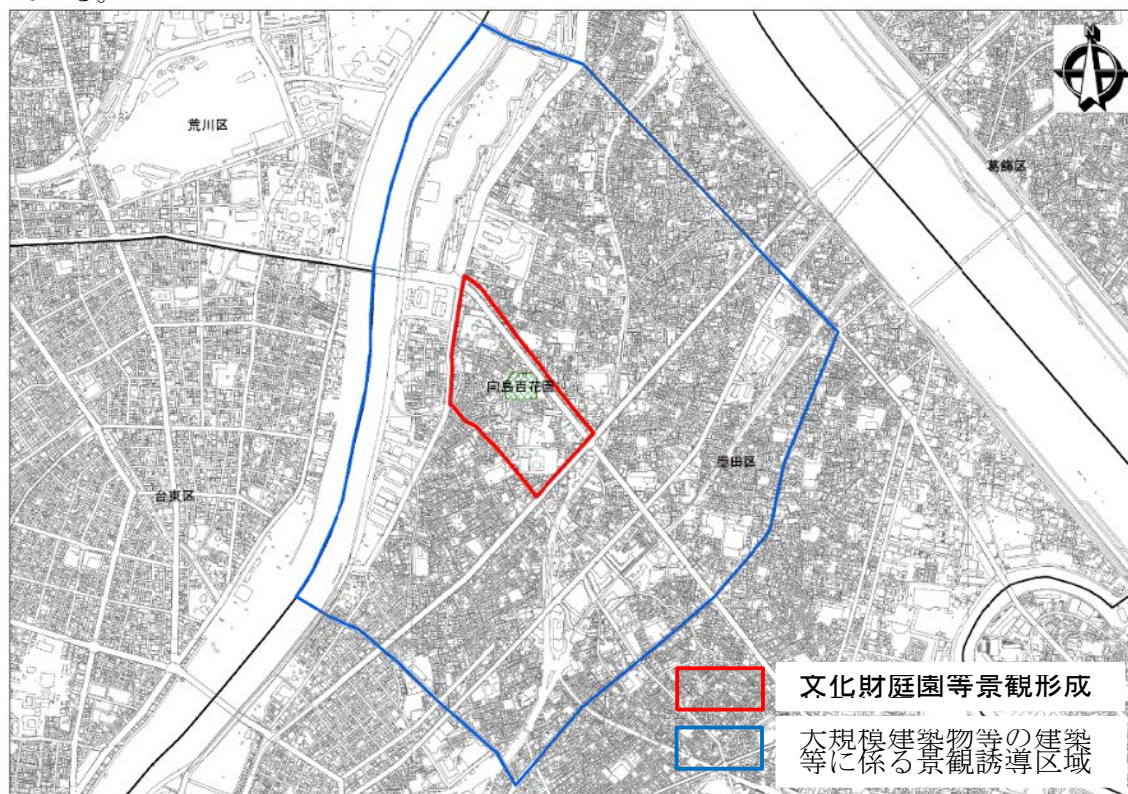


図2-74：本園周辺の景観誘導区域
「東京都景観計画」（平成19年3月策定、平成30年8月改正）東京都都市整備局

(4) 墨田区景観計画（平成 17 年 6 月 13 日）

本園は、墨田区景観計画の景観まちづくり方針において、歴史・文化景観拠点に指定され、隣接する明治通りは景観ネットワークに指定されている（図 2-75）。近年の建築物等の高層化により、建築物等の壁面や屋外広告物などが樹木の高さを超えて出現し、庭園内からの眺望景観の阻害要素となっている。このため、これらの庭園周辺の建築行為等について歴史や文化資源、緑を活かした良好な景観形成を進めるとともに、屋外広告物についても、庭園内からの眺望に十分配慮するよう表示・掲出に関する基準を設定し、景観形成を行うことが必要である。

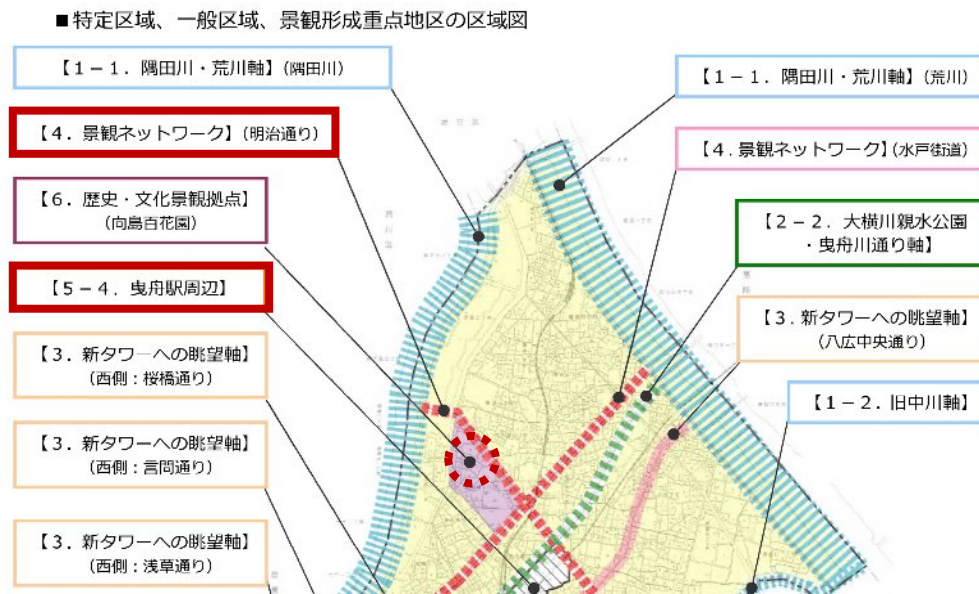


図 2-75：墨田区景観計画（平成 29 年 6 月改定）東京都墨田区

4. 本園の本質的価値

4-1 本質的価値の明示

本園の本質的価値には、芸術上・観賞上の価値と歴史上・学術上の価値がある。歴史的変遷を踏まえ、以下に本園の名勝・史跡としての本質的価値を整理する。

(1) 江戸の園芸文化を受け継ぐ草庭

本園は、元々は商人であった初代鞠塙が、文人達との交流から詩歌にゆかりの深い四季の草花を植えた草庭として江戸後期に作庭した庭園である。

その作庭方法は独特であり、初めは文人墨客などからの寄付により梅を植え、梅園として経営したが、開園からしばらくして、訪れた文人墨客たちと庭園の構想を練り、春の七草、秋の七草など四季の風情を味わえる植物を植えて庶民でも楽しむことができる江戸の園芸文化を表した庭園として造りあげた。園内には池沼、建物を配置し、園路で区切られた植栽地を巡りながら四季の草花を観賞するようになっており、自然災害や戦災による被害と復興を繰り返しながらも、その基本的な構成は、現在にも継承されている。

本園は、初代鞠塙の構想をもとに、後世においても石碑やハギのトンネルなどの幾つかの要素が加えられてきたが、江戸の園芸文化を今もなお受け継ぐ数少ない貴重な庭園である。

(2) 江戸・東京の下町文化を今に伝える庭園

本園は、江戸の町民文化が開いた文化文政の頃、遊覧地として知られた向島において、「隅田川七福神めぐり」や、季節の風物詩となる「月見の会」「虫ききの会」などの行事により、江戸の庶民が風情や娯楽を楽しめる庭園であった。

また、隅田川の川土を使い、都鳥の形をした香合や箸置き、盃、茶碗、皿などの隅田川焼と称した焼き物を来訪者に手土産として渡したり、楽焼の様子を見せたりするなど初代鞠塙の趣向は、庭園の楽しみ方においても工夫が見られた。

こうした庭園の利用は、料亭や芸者遊びなどで栄えた江戸後期の向島界限において、庶民が訪れやすく四季を通じて楽しむことができることから、明治になっても変わらず、庶民のレクリエーションの場としてにぎわいを見せていた。

本園は明治後期の洪水や戦災により壊滅的な被害を被ったが、各時代の所有者のもとで引き継がれ、江戸から続く「月見の会」など市民によって景観と催事が守られてきた。

このように庭園を取り巻く環境や敷地の一部が変わっても、江戸庶民の娯楽や、江戸の趣や風情、静けさや落ち着きある雰囲気味わうことができる庭園として今も活かされている。

(3) 個人が所有した独自の経営を元に発展してきた庭園

江戸の文化の繁栄とともに、庶民が草花の観賞を郊外の遊覧地に求めるようになっていった頃、佐原鞠塙により創設された本園は新梅屋敷として、亀戸の梅屋敷、蒲田の梅林などとともに、その名を知られるようになっていった。やがて本園は文人達との構想により四季折々の植物を植えた百花園として、多くの人々を楽しませるため園地管理や催事に趣向を凝らし、また、本園の梅の品種や季節の植物の書物を刊行して宣伝するなど、初代鞠塙をはじめとした佐原家の経営には余念がなかった。

代々の鞠塙と文人達との交流などにより建てられた多くの石碑は、刻まれた文芸を伝えるとともに、四季の草花と一体となって本園の特徴的な景観を構成しており、庭園を楽しみ、観賞する上でも欠くことのできない要素となっている。

本園は、明治後半に生じた度重なる洪水被害等により佐原家による経営が困難になり、大正4年に所有は小倉家に移り、昭和13（1938）年には小倉家の寄付を受けて東京市の所有になったが、これまで佐原家が継続してきた本園での催事などは現在も引き継がれ、本園を特徴づける要素となっている。

このように、各時代の様々な変遷の中で、初代鞠塙が作庭した草庭が細かな管理により維持されると共に、江戸の町民が慣れ親しんだ文化が継承され、様々な季節の催事等により来園者を楽しませてきた。本園は、このような佐原家の独自の庭園経営を元に発展してきた点に特徴がある。

4-2 庭園の価値を構成する要素

本園は、江戸の園芸文化や文人趣向の要素を含んだ草庭と、江戸の庶民が楽しんだ庭園文化や庭園の経営が特徴であり、本質的価値を構成する要素としては、それぞれの該当する地割や建造物、植物、利用、文人達との関わりを示す石碑などがある。

① 地割

文人達と構想を練って作り上げた草庭は、茶屋の内や茶屋の前の縁台から梅や草花が観賞できた。また、園内に配された園路を歩きながら植え込み地や池の周辺に植栽された草花、さらに池中に植栽された水生植物を観賞していた。本園西側の草庭に対して、東側には南北に細長い池がほぼ変わらない形で存在している。池の周りに視点場が設定され、草庭とは異なる景観を呈している。これらは、江戸時代の絵図や錦絵などに見られる景色であり、草花や、池、池中の水生植物など観賞を目的とした地割が本園の特徴である。

② 建造物

本園には、草花の観賞に訪れた人々が利用した母屋（茶屋）のほか、四阿、桑の茶屋、藤棚などがあったが、ほとんどの建造物はなくなっている。戦後に御成座敷が、集会場として用途を変えて建てられ、現在は会議やサークル活動などに活用されている。

また、池には景観を構成すると共に視点場となる土橋等の橋が架けられている。

③ 植物

本園の本質的価値を構成する植物には、草庭としてふさわしい四季折々の草花があげられる。文人趣向を持った鞠塙は、中国最古の詩集である『詩経』や日本最古の和歌集である『万葉集』にあらわれた歴史的植物を収集し、諸国の名所の名花名草を取り寄せて植えるなどしていた。

草庭として完成した頃に刊行された自らの書である『群芳暦』や、『秋野七草考』『春野七草考』などに掲載されている植物は特に重要である。文化初年頃に刊行されたと思われる『梅屋花品』には、本園の梅の品種が記載されている。また、『牡丹譜』では、本園の花菖蒲、芍薬、牡丹などの品種が掲載されている。当時の本園の植物を記録した書物に掲載されている植物は、江戸の園芸文化を表すものとして重要である。

④ 石碑

本園には、江戸から明治期にかけて建立された多くの石碑が現在に残されていることも特徴である。文政10（1827）年に刊行された「江戸名所花暦」は、季節の草花の名所を解説したガイドブックであるが、この中の向島百花園の箇所に掲載された挿絵（図2-76）には、「百花園、園中四時の花たゆることなし、『万葉集』の草木、『詩経』の草木とてまじるしをしてうゑたり、また墨田川やきといへる陶器を製す」（原文のまま記載）という百花園の解説と、梅の花、入口で客人を迎え入れる様子、焼き物（隅田川焼）に集まる人々の様子と共に、入口の脇に石碑が描かれている²⁰。

この挿絵は、江戸の名所となった向島百花園の要素を1枚に凝縮して表現したものと考え

られることから、本園は、草木を愛でるだけの場所ではなく、それらとともに石碑の情趣も合わせて楽しめる場所と認識している人々がいて、このように紹介されていると考えられる。

本園には石碑が、29基（74p～76p表2-4、5、6参照）あり、内容は、句碑、漢詩碑、歌碑が多くを占める。初代鞠塙の頃より存在するものから、明治時代までに友人や門人が建てたものがほとんどである。そのうち、初代鞠塙が文人達に書いてもらったものもあり、当時の文人達との交流の様子が伺える。

時代別では、江戸時代に9基が建てられ、開園10周年記念の建立の碑はうち3基、以降鞠塙が没する天保2（1831）年までに4基が建てられ、その後の江戸時代の石碑は2基にとどまる。明治時代には17基が建碑された（明治に発掘された2基含む）⁷⁾。

江戸時代の石碑は、開園10周年を記念して亀田鵬斎により建立された墨沱梅莊記碑等、鞠塙の縁故者や、文人あるいはその門下人によって建立されたものが多い。文人と言われる人とのゆかりが深い石碑には前記のほか、千樹庵益賀句碑（酒井抱一建立）、雲山先生看梅碑（宮澤雲山建立）、芭蕉「こんにやく」句碑（鈴木道彦建立）、山上憶良秋の七草歌碑（中井敬義建立）、大窪詩仏画竹碑（中井敬義建立）、金令舎道彦句碑（鈴木道彦建立）がある。石碑の代表格とされる亀田鵬斎墨沱梅莊記碑は、本園のうつくしさと情緒の移り変わりの楽しみ、本園で見た夢のはなしと目覚めた後の鞠塙との語らいを伝える碑であり⁷⁾、江戸時代の本園の様子や楽しみ方、鞠塙の交友関係を知るうえで、重要な役割を持つものである。

明治時代以降の石碑は、榎本武揚らが創設100年の復興を記念して建立した福祿寿尊碑の他、顕彰碑的な要素を持った碑が多く見られ、一つの建碑に本園とつながりがある人やない人も多く石碑に名を刻むようになるという特徴がみられる。特に、明治27（1894）年から明治38（1905）年までの間に建碑が集中しており、日清・日露戦争と重なるこの時代は、明治維新以降の極端な西洋化に対して、江戸時代の文化を見直し始めた頃でもあり、このような時代背景の中で、本園が江戸を感じる場所として再認識されたことが考えられる。明治時代には石工の技術が頂点に達し、当時彫刻石工として有名であった田鶴年（でんかくねん）、宮亀年（みやきねん）、廣群鶴（こうぐんかく）などの名を見ることができる⁷⁾。文字の彫り方にも様々な工夫がなされ、文字彫りの技術が最高峰に達したともいわれる³³⁾。

このように、本園における石碑は、江戸時代の百花園の様子や、鞠塙と文人達との交流を今に伝えるものであるほか、明治以降も、百花園が江戸時代の町人文化を伝える場所として人々に認識されてきたことや、個人の庭であった本園が、多くの人々の関わりの中で維持されてきたことを示すものと考えられる。草庭の中に建立された石碑は、四季の草花と一体となって本園の景観を構成しており、現代においても本園の景色や風情を楽しむ上で、欠かせない要素となっている⁷⁾。



図2-76：「江戸名所花暦」（長谷川雪旦）
文政10（1827）年 国立国会図書館所蔵

⑤ 庭園の利用

江戸時代から続く本園の主な催事には、「隅田川七福神めぐり」、「月見の会」、「虫ききの会」がある。また、明治中頃から正月には「献上七草籠」として春の七草を宮中に献上し、現在では早春の「梅まつり」や秋の「萩まつり」などが開催されている。

本園の「本質的価値を構成する要素」を図2-77及び表2-3に整理した。また、本園の維持管理や運営上必要である要素を「本質的価値を構成する要素以外の要素」として、表2-7（77p）に整理した。

II 本園の歴史・本質的価値



図 2-77：本質的価値を構成する要素の配置図

表 2-3：本園の本質的価値を構成する要素

分類	要素
(1)地割	①池、②丸太護岸、③梅洞水
(2)建造物	④土橋、⑤沢渡り、⑥石橋、⑦稲荷堂（福祿寿尊堂）、 ⑧多賀神社、⑨庭門、⑩桑の茶屋跡、⑪御成座敷跡
(3)植栽	園内各所の梅や景観を構成する植栽地・樹林並びに以下の要素 ⑫ハギのトンネル、⑬春の七草、⑭夏の七草、⑮秋の七草、⑯クズ棚、 ⑰藤棚、⑱藤棚、⑲藤棚、⑳ミツバアケビ棚、㉑つる物棚（カボチャ）、 ㉒つる物棚（へビウリ）、㉓ヒョウタン・ヘチマ棚、㉔菖蒲園
(4)石碑	㉕百花園の沿革の碑、㉖福祿寿尊碑、㉗芭蕉「春もやや～」句碑、 ㉘千樹庵益賀句碑、㉙亀田鵬斎墨沱梅莊記碑、㉚雲山先生看梅碑、 ㉛茶筌塚と柘植黙翁句碑、㉜芭蕉「こんにやく」句碑、 ㉝山上憶良秋の七草歌碑、㉞大窪詩仏画竹碑、㉟金令舎道彦句碑、 ㊱其角堂永機句碑、㊲初代河竹新七追善しのぶ塚、 ㊳二代河竹新七追善きょうげん塚の碑、㊴飯島光我翁之碑銘、 ㊵井上和紫句碑、㊶芝金頭彰碑、㊷鶴久子歌碑、㊸二神石碑、 ㊹最中堂秋耳句碑、㊺矢田蕙哉翁之句碑、㊻日本橋石碑、 ㊼月岡芳年翁之碑、㊽螺舎秀民句碑、㊾杉谷雪樵芦雁画碑、 ㊿七十二峰庵十湖句碑、㊽雪中庵梅年句碑、㊾北元居士句碑、 ㊿寶屋月彦句碑

上記以外の本質的価値を構成する要素：敷地全体に残る地下遺構

(1) 地割

① 池

草庭の中に現れる水辺として江戸時代の絵図にも描かれ、現在までその形状は変わらず存在する。文化の頃発行の『隅田川榎(梅)屋図』(図2-5)には、現在と同じ規模の池が確認できる。明治31(1898)年発行の『隅田堤』には、「文化年間に鞠塙が三百坪の池を開鑿し、池中心に蓮を栽培した。」との記載がある²⁵⁾。

南北に細長い池には中央の「沢渡り」と北側の「土橋」が架かり、池の南北にある視点場から池越しに展開される景観は本園の重要な景観要素である。

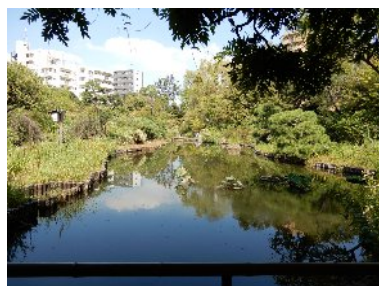


図2-78：藤棚からの池の眺望
(令和元年9月27日)

② 丸太護岸

主に丸太護岸で池の地形を形成する。天保9(1838)年の『東都歳時記』(図2-8)には、丸太護岸らしきもので池の縁取りが描かれており、以降の写真等においても確認できる。



図2-79：丸太護岸
(令和元年7月5日)

③ 梅洞水

今では見るのが少なくなったつるべ式井戸である。売店前の広場に面し、人目を集める。つるべの部分、古写真を参考に、しばしば作り替えられている。

お正月の「若水汲み」など、元々生活用水として使われていたもので、水道が通ってからは、生活用水としては利用されなくなった。石の井戸枠は、隅田川の畔にあった中野碩翁の別荘が取り壊しとなった時に移設したものと言われている¹⁰⁾。



図2-80：梅洞水
(令和元年9月27日)

（２）建造物

④ 土橋

御成座敷前から池を渡る動線である。反りのある形状は水辺の景観の中で目立ち、池のシンボリック的存在である。明治 31（1898）年の新撰東京名所図会（図 2-12）においても橋を確認できる。



図 2-82：土橋
（令和元年 9 月 27 日）

⑤ 沢渡り

池の中央を渡る動線である。

もともとは飛び石であったが、石がだんだん沈下したこと、排水の悪化で池の水位が上昇し、安全上の配慮から、板石を乗せることになり、一部擬岩も使用され、かつての形状と変わっている。板石は、正門前の水路上に小倉常吉が架け替えた「小倉橋」といわれた石橋の板石を、水路の暗渠化で不要になったため転用したものである。なお、「小倉橋」の親柱は正門横に移され、小倉家の援助を具現化した数少ない資源となっている¹⁰⁾。



図 2-83：沢渡り
（令和元年 9 月 27 日）

⑥ 石橋

桑の茶屋から池を渡る動線である。昭和 14（1939）年の向島百花園移管直後植物調査図で、橋状のものが確認できる。

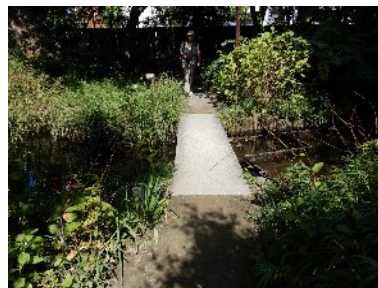


図 2-84：石橋
（令和元年 9 月 27 日）

⑦ 稲荷堂（福祿寿尊堂）

空襲で焼け残った稲荷堂は、園内で唯一の木造建築であり、昭和 24（1949）年に修復工事がされた。現在は、初代鞠場が信仰する福祿寿を祀る祠である。正月の七福神めぐりでは、年に 1 回の御開帳が行われ、多くの利用者でにぎわう。

佐原家の母屋に祀られていたものを、戦後に正月松の内の期間、広場にあった四阿でお祀りした。その後、当時の管理棟に祀ったが、管理棟が無くなり、お稲荷さんと同居するような形で現在の稲荷堂で祀られている。一時、お正月の後、お稲荷さんを主役に初午のイベントを行っていたことがあった¹⁰⁾。



図 2-86：稲荷堂（福祿寿尊堂）
（令和元年 9 月 27 日）

⑧ 多賀神社

事務所とサービスヤードの間に位置するため余り目立たない。『園のいしぶ美』³⁴⁾では、かつての多賀家屋敷跡にできた百花園の一角に、廃絶となった多賀家の霊を祀るため、明治初年、村吏の高木金右衛門が霊神の祠を建立した、と述べられている。



図 2-87：多賀神社
（令和元年 9 月 27 日）

⑨ 庭門

事務所の入口門から 10m 程入った中に位置する。東京市に寄付する前は正門であった。明治末期に発行された『Japanese gardens』³⁵⁾では、石碑(㊦)との位置関係から、現在の場所付近に庭門が存在し、茅葺であったことが確認できる。



図 2-88：庭門
（令和元年 7 月 5 日）

⑩ 桑の茶屋跡

池沼の北側にあり、小段を上った上の休憩園地として利用されているが、明治通りとの間に緩衝物はなく、騒音が著しい。明治 31（1898）年発行の『隅田堤』には、「離れ座敷となり、池に沈めて風雅なる四阿あり。」との記載があるが、昭和 20（1945）年の東京大空襲で焼失した²⁵⁾。



図 2-89：桑の茶屋跡
（令和元年 7 月 5 日）

⑪ 御成座敷跡

開園当時の御成座敷は、初代鞠塙の友人である酒井抱一により設計された数寄屋造りの座敷であった。『向島百花園』³⁾には、「開園当初、池を掘った土を盛り、数尺高い地盤の上に園主がしつらえた洒落た田舎家は、高貴な人々の来園時の休み場として利用された。」との記載がある。また、小高い丘の上には、葛西名物の出水の時の用意としても作られたと言われる⁴⁾。戦災により焼失したが、昭和33(1958)年に集会施設として、新たに建てられ現在は園内のイベントや申し込みによる集会などに利用されている。



図2-90：御成座敷跡
(令和元年9月27日)

(3) 植栽

植物は長い年月の間に変えられており、江戸時代より同一のものを維持するのは難しい。本園の植物はこれまでに、洪水や戦災などにより甚大な被害を受けたが、江戸の園芸文化を受け継ぐ草庭として、新たに植えられたものが存在する。

⑫ ハギのトンネル

ハギを竹の柵に覆わせた全長 30mにわたるトンネル状の植え込みである。9月下旬には満開となり、本園の名物として、萩まつりには多くの利用者が訪れる。明治の大洪水以降、茶の木があった小径の両側に萩を植え並べ、トンネルに仕立てたのがはじめと言われている。当時は突き当り左右に分かれていたが、少しずつ形を変え、昭和初期には現在のような形になった¹⁰⁾。



図2-91：ハギのトンネル
(令和元年9月27日)

⑬ 春の七草

年末から正月七日にかけ、白砂と藁縁による春の七草として展示される。明治中頃から「献上七草籠」を宮中に献上する習わしがあり、売店では一般にも七草籠の注文を受けるなど、新春の風物詩として人気がある。『十方庵遊歴雑記』¹³⁾の中では、文化6(1809)年から春の七草を植えはじめた、との記載がある。



図2-92：春の七草
(平成31年3月11日)

⑭ 夏の七草

古くから七夕の花として飾られたのが夏の七草である。本園でも近年に導入された。



図2-93：夏の七草
(令和元年9月27日)

⑮ 秋の七草

山上憶良の七草歌碑と併せ秋の七草として展示される。開園当時の初代鞠塙が力を入れていたのは、梅と秋の七草であったといわれる。『十方庵遊歴雑記』¹³⁾の中で、文化6(1809)年から秋の七草を植えはじめた、との記載があり、『隅田川楳(梅)屋図』(図2-5)では、秋の七草が確認できる。



図2-94：秋の七草
(令和元年9月27日)

⑯ クズ棚

大きな葉で深い緑陰を形成する。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）では、現在のクズ棚に並行して同様の棚が認められるが、東京市移管後の平面図（昭和14（1939）年以降）（図2-29）では確認できない。



図2-95：クズ棚
（令和元年9月27日）

⑰ 藤棚

四阿横に位置し、規模が約6.3m×4.8mの藤棚で、棚の下には縁台が配置されている。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）では、現在の場所にクズの名が確認できるが、東京市移管後の平面図（昭和14（1939）年以降）（図2-29）では、植物名の記載はなかった。



図2-96：藤棚
（令和元年9月27日）

⑱ 藤棚

クズ棚と並んで配置され、規模が約4.5m×3.9mの藤棚で、棚の下には縁台が配置されている。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）には、現在の場所にクズの名が確認できる。



図2-97：藤棚
（令和元年9月27日）

⑲ 藤棚

南北に細長い池沼を南から北に眺める位置にあり、本園の重要な視点場のひとつである。周囲を緑に囲まれた涼しげな場所から、池沼の様子をゆっくりと眺めることができる。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）には、現在の場所にフジの名が確認できる。



図2-98：藤棚
（令和元年7月5日）

⑳ ミツバアケビ棚

広場と広場を結ぶ園路上に設置されている。小さく丸い葉が深い緑陰を形成し、花と実も楽しむことができる。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）では、現在の場所に棚は確認できないが、昭和38（1955）年代の上空からの写真（図2-42）では、植物に覆われた棚の存在が確認できる。



図2-99：ミツバアケビ棚
（令和元年7月5日）

⑳ つる物棚（カボチャ）

売店前の広場に周囲のつる・野菜棚と共に楽しみある趣を演出する。観賞用カボチャであり、食用ではない。

比較的新しい棚で、作物はしばしば変わっている³⁶⁾。



図2-100：つる物棚（カボチャ）
（令和元年9月27日）

㉑ つる物棚（ヘビウリ）

売店前の広場に、周囲のつる・野菜棚と共に楽しみある趣を演出する。独特な姿で珍しい果実が人目を集め、それを見に来る利用者も増えた。

比較的新しい棚で、作物はしばしば変わっている³⁶⁾。



図2-101：つる物棚（ヘビウリ）
（令和元年9月27日）

㉒ ヒョウタン・ヘチマ棚

売店前から御成座敷への園路上に設置され、全長にわたり果実が垂れ下がる姿が人目を集める。東京市移管前の平面図（大正4（1915）年頃から昭和13（1938）年頃まで）（図2-15）では、現在の場所付近にアケビ棚と確認でき、東京市移管後の平面図（昭和14（1939）年以降）（図2-29）では、ムベ棚として確認ができる。

一時は職員によりヘビ瓜も加えられたことがあった³⁶⁾。



図2-102：ヒョウタン・ヘチマ棚
（令和元年9月27日）

㉓ 菖蒲園

初夏の水辺を華やかに演出する。東京市移管後の平面図（昭和14（1939）年以降）（図2-29）では、現在の場所付近にアシがあると確認できるが、明治31（1898）年発行の『隅田堤』では、「文化年間に鞠塙が池の開鑿するさい、花菖蒲を培養した。」との記載がある²⁵⁾。



図2-103：菖蒲園
（令和元年6月8日）

（４）石碑

◎ 百花園の沿革の碑

昭和 14（1939）年建立。

昭和 13（1938）年 10 月に百花園の全てが東京市に寄付された翌年の昭和 14（1939）年に公開されるにあたり、その由来を記して後世に伝えようという趣旨で東京市が建立した。文化元年の開創から始まり、風流文雅の名所として長年知られていたこと、梅や四季百花の粹を集めて詩韻豊かな花園となったこと、明治以降は大水（洪水）のために荒廃し、大正初めに小倉常吉に支援を求めながら保存復旧につとめたこと、昭和 8（1933）年に国の史蹟名勝に指定されたことが刻まれている⁷⁾。



図 2-104：石碑◎
（令和 3 年 1 月 17 日）

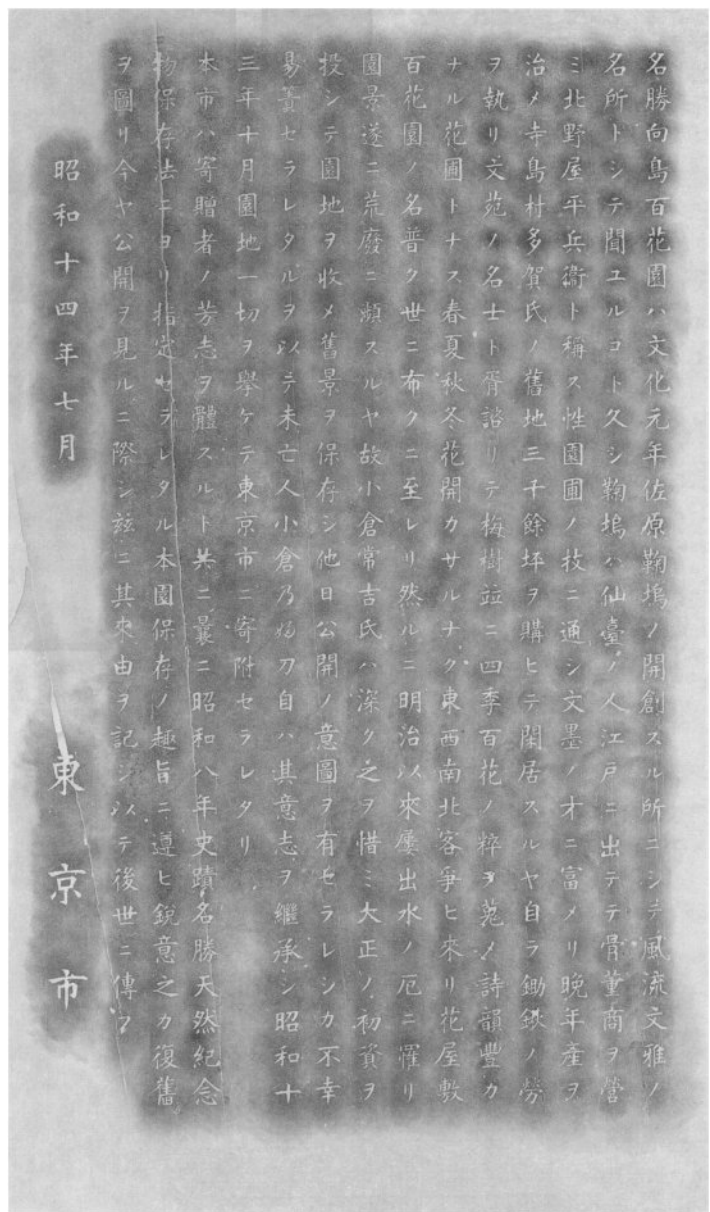


図 2-105：向島百花園石碑修復工事報告書 拓本資料
平成 23（2011）年 東京都東部公園緑地事務所



図 2-104（拡大）：石碑◎
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊦ 福祿寿尊碑

明治 41 (1908) 年建立。

鞠塙の友人達が福祿寿で考案した隅田川七福神めぐりを、創設 100 年の復興と共に建立された碑である。



図 2-106 : 石碑㊦
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊧ 芭蕉「春もやや〜」句碑

天保 7 (1836) 年建立。

芭蕉の真蹟画賛の句の傑作である。北元居士句碑と同じく江戸の俳句愛好者集団により建立された。



図 2-107 : 石碑㊧
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊨ 千樹庵益賀句碑

文化 11 (1814) 年建立。

開園 10 年を記念して建立されたもので、百花園に集う文人の中心的存在の抱一が園を「都鳥庵」と呼んでいたイメージを詠まれた句である。



図 2-108 : 石碑㊨
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊦ 亀田鵬齋墨沱梅莊記碑

文化 11（1814）年建立。

開園 10 年を記念して、鞠塲の友人である亀田鵬齋の撰文と書、石工窪世祥により建立された⁷⁾。百花園の美しさと情緒の移り変わりの楽しみ、百花園で見た夢のはなしと目覚めた後の鞠塲との語らいを伝える碑である。



図 2-109：石碑㊦
（令和 3 年 1 月 17 日）



図 2-109（拡大）：石碑㊦
（令和 3 年 1 月 17 日）

図 2-110：向島百花園石碑修復工事報告書 拓本資料 平成 23（2011）年
東京都東部公園緑地事務所

II 本園の歴史・本質的価値

㊦ 雲山先生看梅碑

文政 10 (1827) 年建立。

芳しく清らかな空気漂う春の百花園の光景を格調高く詠った碑である。



図 2-111 : 石碑㊦
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊧ 茶笏塚と柘植黙翁句碑

明治 25 (1892) 年建立。

千家流の茶人柘植黙翁の一周忌に門弟等が先師の遺志により建てた碑である。



図 2-112 : 石碑㊧
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊨ 芭蕉「こんにやく」句碑

文化 11 (1814) 年建立。

開園 10 年を記念して建立されたもので、去来と芭蕉の共通の知人の死を悼み、蒟蒻の薄い刺身と梅咲く余寒の時節をとり合わせ弔意を示した碑である。



図 2-113 : 石碑㊨
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊩ 山上憶良秋の七草歌碑

文政 4 (1821) 年建立。

書も狂歌も巧みであった中井敬義の絶筆を、門人等が先師の遺志 (百花園への建立) により建てた碑である。



図 2-114 : 石碑㊩
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊪ 大窪詩仏画竹碑

文政 5 (1822) 年建立。

詩仏は百花園創設に梅を送った人物であるが画としては竹を得意とし、親交の深い文人達により詩仏の竹を伝えることを目的に建立された碑である。



図 2-115 : 石碑㊪
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊦ 金令舎道彦句碑

文政 13（1830）年建立。

鞠塙と同郷の友であった道彦の十三回忌に建立された碑である。鞠塙は自身の書にて碑の裏を見ることを勧めており、建立者への配慮を見せている。



図 2-116：石碑㊦
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊧ 其角堂永機句碑

明治 32（1899）年建立。

幕末・明治前半の俳人である其角堂永機が齢 77 の際、友人の魚河岸主や歌舞伎俳優などにより建立された碑である。



図 2-117：石碑㊧
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊨ 初代河竹新七追善しのぶ塚

明治 13（1880）年建立。

浄瑠璃作家初代河竹新七を偲び、代表作『葱売』の功績を伝える碑である。



図 2-118：石碑㊨
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊩ 二代河竹新七追善きょうげん塚の碑

明治 27（1894）年建立。

二代目河竹新七（河竹黙阿弥）の功績を、初代黙阿弥が「しのぶ塚」を建てたことになぞらえて、狂言（きょうげん）塚として残した碑である。



図 2-119：石碑㊩
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊪ 飯島光我翁之碑銘

明治 33（1900）年建立。

画家飯島光我を偲び、光我の生涯と創作活動、光我の容貌の美しさを漢詩に表した碑である。



図 2-120：石碑㊪
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊦ 井上和紫句碑

明治 32 (1899) 年建立。

魚河岸鷺屋の主人として、文人達との交流記や自ら書き下ろしの句により、自身を真の江戸っ子と称した碑である。



図 2-121 : 石碑㊦
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊧ 芝金顕彰碑

明治 32 (1899) 年建立。

榎本武揚の建立により、端唄の芝一派である哥澤芝金の名を記した篆額とともに、芝金の沿革や唄を伝える碑である。



図 2-122 : 石碑㊧
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊨ 鶴久子歌碑

明治 35 (1902) 年建立。

百花園の石碑の中で唯一、女性により記された碑文であり、当時の政経界を代表する有力者の夫人達が中心となり建立された。



図 2-123 : 石碑㊨
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊩ 二神石碑

建立年不明。

園の東部で発見された。イザナギ、イザナミ両神から生まれた木の神“久久能智神”と野の神“鹿屋野久売神”を表す碑である。



図 2-124 : 石碑㊩
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊪ 最中堂秋耳句碑

明治 33 (1900) 年建立。

いけばなの梶井宮流には師の祝事に碑を建てる習わしがあり、最中堂秋耳のお祝いに建立された碑である。



図 2-125 : 石碑㊪
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊦ 矢田蕙哉翁之句碑

明治 26（1893）年建立。

今は絶えた鷺流の狂言師であった蕙哉の絶世の句を、ゆかりのあった人々の手により建立された碑である。



図 2-126：石碑㊦
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊧ 日本橋石碑

建立年不明。

側面に詩のような刻みがあり、円柱形の柱に「日本橋」と記入されている。日本橋本体にあったものではないが、本体の墨跡は 15 代将軍慶喜公によるものとの諸説もある³⁶⁾。



図 2-127：石碑㊧
（令和元年 9 月 27 日）

㊨ 月岡芳年翁之碑

明治 30（1897）年建立。

浮世絵師の芳年の七回忌にあたり、代表者の岡倉天心をはじめ新聞社や文人などの総勢 89 名が建立に協力した碑である。



図 2-128：石碑㊨
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊩ 螺舎秀民句碑

明治 18（1885）年建立。

吉原の妓楼大黒屋の主人であった二世螺舎秀民が、自身が好む瀟洒な風流さを、江戸俳句の見た目の面白さの中に表した碑である。



図 2-129：石碑㊩
（令和 3 年 1 月 17 日）

㊪ 杉谷雪樵芦雁画碑

明治 34（1901）年建立。

雪樵の遺墨である芦雁の図を石に刻み、雪樵の盛名を不朽に伝えるために百花園に建立された碑である。



図 2-130：石碑㊪
（令和 3 年 1 月 17 日）

II 本園の歴史・本質的価値

㊦ 七十二峰庵十湖句碑

明治 34 (1901) 年建立。

県会議員であった十湖は退職後、俳句だけの生活を送る中、自作の碑 40 数基を各地に建立した中の一つ。費用が乏しくなり小さな碑となった。



図 2-131 : 石碑㊦
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊧ 雪中庵梅年句碑

明治 38 (1905) 年建立。

其角堂の永機が雪中庵の梅年に本を送り、当時、俳句の人気を競った雪中庵と其角堂の 100 年に及ぶ対立が解消した。その数年後に建立された碑である。



図 2-132 : 石碑㊧
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊨ 北元居士句碑

天保 9 (1838) 年建立。

筑波山を望む方向に建立し、俳諧の別称であるつくばねの道への上達を願い、建立された碑である。



図 2-133 : 石碑㊨
(令和 3 年 1 月 17 日)

㊩ 寶屋月彦句碑

明治 24 (1891) 年建立。

幕府の役人であった寶屋月彦が 66 歳の時に建立された碑である。



図 2-134 : 石碑㊩
(令和 3 年 1 月 17 日)

表2-4：石碑一覧表（1/3）

石碑名称	碑面内容		建立年代	建立者	備考
	表面	裏面			
① 百花園の沿革の碑 百花園の公開に際し、百花園の沿革及び復旧について後世に伝える碑。	由来の碑/東京市	—	昭和14年	東京市	
② 福祿寿尊碑 鞠場の友人達が福祿寿で考案した隅田川七福神を、創設100年の復興と共に建立された碑。	題名 字/土方久元 鐫/田鶴年	建立者名	明治41年	榎本武揚他	榎本武揚が創設100年の復興の際に建立した碑として重要である。
③ 芭蕉「春もやや〜」句碑 芭蕉の真蹟画賛の句の傑作。へ(30)元居士と同じく江戸の俳句愛好者集団による建立。	句碑/松尾芭蕉 鐫/窪世祥	建立者名	天保7年 鞠鶯没後	旭連	
④ 千樹庵益賀句碑 開園10年を記念して建立。 百花園に集う文人の中心的存在の抱一が園を「都鳥庵」と呼んでいたイメージで詠まれた句である。	句碑/千樹庵益賀	書/酒井抱一	文化11年 鞠鶯生前	酒井抱一	鞠鶯の生前に、酒井抱一が開園10周年を記念し建立した碑として重要である。
⑤ 亀田鵬斎墨沓梅荘記碑 開園10年を記念して建立。 百花園の美しさと情緒の移り変わりの楽しみ、百花園で見た夢のはなしと目覚めた後の鞠鶯との語らいを伝える碑。	漢詩碑/亀田鵬斎 鐫/窪世祥	—	文化11年 鞠鶯生前	友人・門人	鞠鶯の生前に、亀田鵬斎が開園10周年を記念し建立した碑として重要である。
⑥ 雲山先生看梅碑 芳しく清らかな空気漂う春の百花園の光景を格調高く詠った碑。	漢詩碑/宮澤雲山 刻/廣群鶴・皐鶴	—	文政10年 鞠鶯生前	守邨鷗嶼	鞠鶯との関係は不明だが、鞠鶯の生前に建立した碑として重要である。
⑦ 茶筌塚と柘植黙翁句碑 千家流の茶人柘植黙翁の一周忌に門弟等が先師の遺志によりたてた碑。	句碑/柘植黙翁 書/如電居士大槻 刻/田鶴年	—	明治25年	門弟等	
⑧ 芭蕉「こんにやく」句碑 開園10年を記念して建立。 去来と芭蕉の共通の知人の死を悼み、蒟蒻の薄い刺身と梅咲く余寒の時節をとり合わせ弔意を示した碑。	句碑/松尾芭蕉	書/金令舎道彦	文化11年 鞠鶯生前	鈴木道彦	鞠鶯の生前に、鈴木道彦が開園10周年を記念し建立した碑として重要である。
⑨ 山上憶良秋の七草歌碑 書も狂歌も巧みであった中井敬義の絶筆を、門人等が先師の遺志（百花園への建立）によりたてた碑。	歌碑/山上憶良 書/薫堂敬義 鐫/窪世祥	撰文・書/横井忠徳	文政4年 鞠鶯生前	薫堂敬義門人	鞠鶯の生前に、中井敬義の追善として建立した碑として重要である。

表2-5：石碑一覧表（2/3）

石碑名称	碑面内容		建立年代	建立者	備考
	表面	裏面			
④ 大窪詩仏画竹碑 詩仏は百花園創設に梅を送った人物であるが画としては竹を得意とし、親交の深い文人達により詩仏の竹を伝えることを目的に建立された碑。	画/詩仏 書/佐羽淡齋 刻/鍋木雲潭	撰文/朝川善庵 書/巻菱湖	文政5年 鞠鶯生前	中井敬義門人	鞠鶯の生前に、大窪詩仏の画を中井敬義が建立した碑として重要である。
⑤ 金令舎道彦句碑 鞠場と同郷の友であった道彦の十三回忌に建立された碑。鞠場は別の書にて碑の裏を見ることを勧めており、建立者への配慮をみせている。	句碑/鈴木道彦	建立者名 鍋/窪世祥	文政13年 鞠鶯生前	門人	鞠鶯の生前に、鈴木道彦の追善として建立した碑として重要である。
⑥ 其角堂永機句碑 永機が齢77の際、友人の魚河岸主や歌舞伎俳優などにより建立された碑。	句碑/其角堂永機	建立者名 撰文・書/判古無添 刻/三瓶石垣	明治32年?	5代目菊五郎等	
⑦ 初代河竹新七追善しのぶ塚 浄瑠璃作家初代河竹新七を偲び、代表作『葱売』の功績を伝える碑。	追善/古河黙阿弥 書/高林二峯 鍋/松仙口	—	明治13年	古河黙阿弥	
⑧ 二代河竹新七追善きょうげん塚の碑 二代目河竹新七の功績を、初代の『葱売』になぞらえて、狂言（きょうげん）塚として残した碑。	追善/三世河竹新七 書/高林二峯 刻/松仙口・井亀鶴	—	明治27年	三世河竹新七	
⑨ 飯島光我翁之碑銘 画家飯島光我をしのび、光我の生涯と創作活動、光我の容貌の美しさを漢詩に表した碑。	漢詩碑・書/高林五峯		明治33年	友人・門人	
⑩ 井上和紫句碑 魚河岸鶯屋の主人として、文人達との交流記や自ら書き下ろしの句により、真の江戸っ子と称した碑。	句碑/井上和紫	建立者名 撰文/半古墨僊	明治32年	友人	
⑪ 芝金顕彰碑 榎本武揚が端唄の芝一派である哥澤芝金の名を記した篆額とともに、芝金の沿革や唄を伝える碑。	篆額/榎本武揚 撰文・書/渡邊光丸 刻/三瓶石垣	建立者名	明治32年	3代目芝金等 榎本武揚	
⑫ 鶴久子歌碑 百花園の石碑の中で唯一、女性が中心となり建立された碑文であり、政経界を代表する人々の夫人が中心となった碑。	歌碑/鶴久子	建立者名 撰/藤原稜	明治35年	友人	
⑬ 二神石碑 園の東部で発見された。イザナギ、イザナミ両神から生まれた木の神“久久能智神”と野の神“鹿屋野久売神”を表す碑。	—	—	—	—	
⑭ 最中堂秋耳句碑 活花の梶井宮流には師の祝事に碑を建てる習わしがあり、最中堂秋耳のお祝いに建立された碑。	句碑/最中堂秋耳 書/真中堂旭生	建立者名 刻/宮亀年	明治33年	子息	

表 2 - 6 : 石碑一覧表 (3/3)

石碑名称	碑面内容		建立年代	建立者	備考
	表面	裏面			
㊦ 矢田蕙哉翁之句碑 今は絶えた鷺流の狂言師であり、絶世の句をゆかりのあった人々の手により建立された碑。	句碑/矢田蕙哉書/晋永機	建立者名書/七世永機	明治26年	未亡人等	
㊧ 日本橋石碑	—	—	—	—	
㊨ 月岡芳年翁之碑 芳年の七回忌にあたり、代表者の岡倉天心をはじめ新聞社や文人などの総勢89名が建立に協力した碑。	題・字/二条基弘 撰文・書/小杉楹邨 刻/吉川黄雲	建立者名	明治30年	門人	
㊩ 螺舎秀民句碑 二世螺舎秀民は吉原の妓楼大黒屋主人で風流瀟洒を好み、江戸俳句の見た目の面白さを表した碑。	句碑/二世螺舎秀民 撰文・書/市川三兼	句碑/三世螺舎季節 書/賽晋齋	明治18年	門人等	
㊪ 杉谷雪樵芦雁画碑 雪樵の遺墨である芦雁の図を石に刻み、雪樵の盛名を不朽に伝えるために百花園に建立された碑。	画/杉谷雪樵 刻/田鶴年	建立者名	明治34年	門弟根本樵谷	
㊫ 七十二峰庵十湖句碑 県会議員の後俳句だけの生活となり、自作建立の碑40数基の中の一つ。費用が乏しくなり小さな碑となった。	句碑/七十二峰庵十湖 書/八十童かつみ 刻/木旭辰	年月日	明治34年	本人	
㊬ 雪中庵梅年句碑 永機が梅年に本を送り、雪中庵と其角堂の100年に及ぶ対立が解消した数年後に建立された碑。	句碑/雪中庵梅年 書/雪蓑人宜來 鐫/志鎌三秀	建立者名	明治38年	門弟雪中庵9世	
㊭ 北元居士句碑 筑波山を望む方向に建立し、俳諧の別称つくばねの道への上達を願い建立された碑。	句碑/鴨伊兵衛 書/黒川権草	鐫/志鎌三秀	天保9年 鞠鶉没後	江戸旭惣連	
㊮ 寶屋月彦 幕府の役人であった月彦が66歳の時に建立された碑。	句碑/寶屋月彦	書/松本篤齊 鐫/眞間田貴虎	明治24年	宝組社中	

II 本園の歴史・本質的価値

表 2-7：本園の本質的価値を構成する要素以外の要素

分類	要素
地割	滝
建造物	コンクリート橋
植栽	本質的価値を構成する植栽（表 2-3）以外の植栽
公開・活用施設	掲示板、案内板、解説板、御成座敷（集会所）
休養施設	あずまや、縁台
便益施設	便所、水飲み場、売店さはら
管理施設	給排水管、電気通信管、ロープ柵、給水ポンプ、外周柵、管理用門扉、分電盤、循環施設、照明灯
管理運営のための建物	管理事務所、倉庫、温室、資材置場
児童遊園	児童遊園内の施設

記載に用いた参考文献

- 1) 井部由美子. 墨田外史すみだ 一卷. 昭和42(1967)年. 墨田区所蔵.
- 2) 小野佐和子. 江戸郊外の遊覧地. 昭和58(1983)年. 造園雑誌46(4)所収. 日本造園学会所蔵.
- 3) 前島康彦. 向島百花園. 昭和56(1981)年. 東京都公園協会所蔵.
- 4) 前島康彦. 東京公園史話 その四. 平成元(1989)年11月. 東京都公園協会所蔵.
- 5) 齊藤月雫、長谷川雪旦. 東都歳時記 4巻. 国立国会図書館所蔵.
- 6) 都市美向島界限. 墨田区所蔵.
- 7) 向島百花園サービスセンター. 向島百花園創設200周年記念 江戸の花屋敷 百花園学入門. 平成20(2008)年3月. 東京都公園協会所蔵.
- 8) 田中誠. 緑と水のひろば 72号. 平成25(2013)年7月. 東京都公園協会所蔵.
- 9) 藤原寛正. 歴史と旅 3月号 江戸のガーデニング. 平成13(2001)年3月. 東京都公園協会.
- 10) 佐原滋元氏ヒアリング. 令和2(2020)年1月20日
- 11) 坂田皇蔭. 『野辺の白露』
- 12) 為永春水. 春色梅居美婦彌 第十五巻. 天保12(1841)年. 国立国会図書館所蔵
- 13) 釈敬順. 十方庵遊歴雑記 三編巻の上第二十二. 文化12(1815)年. 国立国会図書館所蔵.
- 14) 斎藤彦麿. 神代餘波 弘化4(1847)年. 西尾市岩瀬文庫所蔵
- 15) 梅屋鞠塙. 梅屋花品. 文化初年(1804)年頃. 国立国会図書館所蔵.
- 16) 北野屋鞠塙. 盛音集. 文化元(1804)年. 佐原家所蔵.
- 17) 式亭三馬. 浮世風呂四篇之中. 文化8(1811)年. 国立国会図書館所蔵.
- 18) 花屋敷菊塙. 墨水遊覧誌. 文政11(1828)年. 国立国会図書館所蔵.
- 19) 北野秋芳. 春野七種考. 文政11(1814)年. 国立国会図書館所蔵.
- 20) 岡山鳥. 江戸名所花歴. 文政10(1827)年. 国立国会図書館所蔵.
- 21) 寺門静軒. 江戸繁昌記. 天保6(1835)年. 国立国会図書館所蔵.
- 22) 斎藤月岑. 武江年表. 大正元(1912)年. 国立国会図書館所蔵.
- 23) 依田学海. 墨水廿四記. 明治14(1881)年. 国立国会図書館所蔵.
- 24) 桂巖. 墨水三十景詩. 明治19(1886)年. 国立国会図書館所蔵.
- 25) 風俗画報臨時増刊 新撰東京名所園會第13編. 明治31(1898)年4号. 国立国会図書館所蔵.
- 26) 今井栄. 墨東歳時記 江戸下町の生活と行事. 昭和31(1956)年. 佐原家所蔵.
- 27) 成島柳北. 柳北全集『百花園観秋草記』. 明治30(1897)年. 国立国会図書館所蔵.
- 28) 七草の会. ななくさ 75号. 平成7(1995)年10月. 佐原家所蔵.
- 29) 北野秋芳. 群芳曆. 文政6、7(1809、1810)年. 東京都公園協会所蔵.
- 30) 東京市告示第三百九十二號. 東京都所蔵
- 31) 七草の会. ななくさ 139号. 平成29(2017)年9月. 佐原家所蔵.
- 32) 第3回都市計画公園緑地調査特別委員会議事録(昭和32年2月27日). 昭和32(1957)年. 東京都所蔵
- 33) 七草の会. ななくさ 109号. 平成19(2007)年7月. 佐原家所蔵.
- 34) 佐原平兵衛. 園のいしぶ美. 明治27(1894)年. 墨田区所蔵.
- 35) Mrs. Basil Taylor. Japanese gardens. 明治45(1912)年. 佐原家所蔵.
- 36) 佐原滋元氏ヒアリング. 令和3(2021)年9月10日